

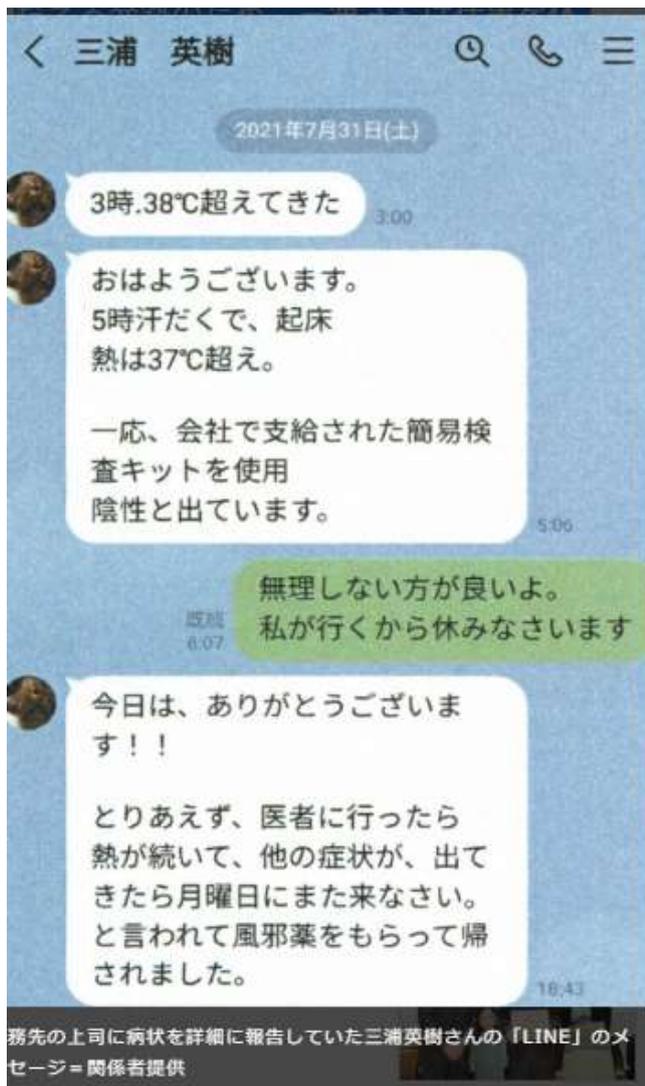
「コロナ陽性頂きました」半日後、自宅療養の仲間は亡くなった

2022年4月25日 毎日新聞

新型コロナウイルスの感染が拡大する度に PCR 検査の遅れが課題になる。医師の検査判断の遅れや、検査予約の殺到などが理由として指摘される。自宅で療養中に死亡した人の遺族でつくる「自宅放置死遺族会」が経緯を検証した昨年8月の事例では、受診から検査まで4日もかかり、糖尿病の持病があるのに入院できないまま容体が急変した。「もっと早く検査や治療を受けられていたら」。遺族は悔やんでいる。

「ひいー」。昨年8月6日午前2時、相模原市の三浦英樹さん（当時53歳）の大きなうめき声が寝室から漏れた。妻智子さん（53）が部屋をのぞくと、三浦さんはけいれんし、体は少し冷たくなっていた。すぐに救急車を呼んだ。その電話の最中に呼吸が止まった。搬送先の病院で死亡が確認され、病院の医師からは「CT（コンピューター断層撮影）で肺は真っ白だった」と告げられた。重い肺炎だ。

容体が急変する2時間前までは会話ができていた。智子さんは「まさかその日に亡くなるなんて」と肩を落とした。ワクチンは接種券が届いたばかりで予約もできていなかったという。



自宅放置死遺族会の活動に協力する医師や弁護士らが、保健所などの資料を精査。経緯を振り返ると、医療体制を巡って課題が浮かび上がってきた。

死亡する約1週間前の7月31日。38度を超える発熱のため、三浦さんは仕事を休み、かかりつけのクリニックを受診した。当時は感染拡大のさなかだったが、医師は検査せずに風邪薬だけ出した。2日後の8月2日にも受診した。クリニックはPCR検査を実施しているとホームページでうたうが、市保健所に連絡してほかの医療機関での検査を三浦さんに勧めるだけだった。

三浦さんは市保健所を通じて、4日ようやくPCR検査を受けられ、5日に陽性が判明した。糖尿病の持病があったのに、保健所は陽性を伝える電話で入院についての説明をしなかった。かかりつけ医にも相談したが「緊急時は救急車を自分で呼んで」と言われた。

同会の検証作業に参加している「水野クリニック」（大阪府）の水野宅郎院長は自身の診療所で検査ができない場合は、地域の他の医院をすぐに紹介していたといい「コ

ロナは早期に治療が開始できれば悪化する可能性も低くなる。検査ができない場合には、



医療機関や行政は地域で早く検査を受けられるところを紹介することが重要だ」と指摘している。三浦英樹さんが勤務先の上司へ陽性判明を伝えた際の「LINE」のメッセージ。三浦さんはこの半日後に亡くなった＝関係者提供拡大

三浦さんは電気工事会社に長年勤務し、責任感があり、周囲に頼られる存在だったという。仕事で悩んでいる若手からの相談を受けるなど、兄貴肌でもあった。発症後、勤務先の上司に病状を逐一報告していた。陽性の検査結果が出ると「陽性頂きました」と「LINE（ライン）」でメッセージを送信。亡くなったのはこのわずか半日後のことだ。「死ななくて済んだはずの大事な仲間を失った」と上司は悲しむ。

相模原市によると当時、市内ではPCR検査の予約が相次ぎ、当日中に検査を受けられないことはあったという。ただ、市は「検査が必要な人は全員受けられた。大幅に遅れた事案は覚知していない」と、「検査遅れ」はなかったとの立場だ。政府は、自宅療養中の死亡が問題化していることを踏まえ、昨年8～9月に起きた202件については年齢構成や基礎疾患の有無などを集計した。ただ、三浦さんのような個別の事例に沿って医療体制についての詳しい

い検証は行っていない。

自宅療養死で浮き彫りになった課題は十分に検証されないまま地方を中心に感染拡大が進み、いま「第7波」の危機を迎えている。【村田拓也】